

11月皆既日食帯への旅

木村 精二

編集部から命ぜられたテーマを料理する前に、迷いが続いた。観測目的地は2つ、ニューギニアとニューカレドニアである。前者は昨年6月の本番とそれに先立つ半年前の下見行きで、情報は集めてあるし、すでにあちこちに書き（この「日食情報」にも載せた）、しゃべってきた。それらを参照して、といえぱそれでおしまい。（というわけにもいくまいが）ところが後者のニューカレドニアについては、体験的知識がない上に、皆既帯の通る島がある、いやない、という正反対のうわさに接し、これでは現地へ飛ばないで書くのは、無責任だ、と考えていたのである。しかし、実に運がよく締切り日ギリギリに、2つの権威ある情報を入手した。ようやく、ペンが進みそうである。

☆Defense Mapping Agency reports now that Sandy Island no longer exists. That is based on the report of a French hydrographic purveying expedition in 1979. (アメリカ海軍天文台2月発行のCircular No 168より)

☆Re: Solar Eclipse — Now have official report from French Navy. Sandy Island was only sand bank and no longer exists. Last seen 1969 …… (U. T. I. という国際的な旅行会社の現地支局が日本支局へ1983年9月に回答したテレックスより—— 近畿日本ツーリストの好意による)。

1. パプア・ニューギニア

皆既帯の始まりはインドネシアのハルマヘラ島だが、よほどの物好きか特殊な観測目的でない
と避けるはずである。次の通過地帯はニューギニア島で、西半分はインドネシア領のイリアンジャ
ジャ。ここも太陽高度 15° 以下で条件悪く、しかも入国が困難^{*}だから、取り上げない。

となると、第1の観測候補地は、同島東半分のパプア・ニューギニアということになる。
その首都はポートモレスビー。日本から直通便はない。ホンコンまたはシドニー乗り換えとなる。

まずホンコン回りについて。東京・ホンコン間は、1日何本もいろんなキャリアーがあるので
問題はない。その先、ホンコン・ポートモレスビー間は、キャセイ他共同運航便が週2便のみ。
従って、現実性のある旅程は、東京発11月19日(月)ーホンコン発同日の21:50ーポート
モレスビー着20日6:15、23日の日食まで丸3日あり。ポートモレスビー発25日16:15ー
ホンコン着同日20:30ー東京着26日(月)という8日間が普通の旅行計画になる。帰りは24
日発シンガポール経由東京着25日(日)の7日コースも可能だ。

次にシドニー回りについて。東京・シドニー間は日本航空が週3便ずつ、シドニー・ポートモ
レスビー間はカンタスとニューギニア航空が週3便ずつ飛んでいる。

日航を使うと、東京発19日(月)21:30ーシドニー発20日8:00ーポートモレスビー

着同日 13:15。23 日の日食まで 3 日近くあり。ポートモレスビー発 25 日 15:15 — シドニー着同日 20:30 — (2 泊して) シドニー発 27 日 22:00 — 東京着 28 日(水) 6:15 のという 10 日間の長いコースとなる。ムリして日食の午後 15:15 ポートモレスビー発に乗れば、シドニー 1 泊で 25 日(日) 6:15 に東京着という 7 日間の離れ技も可能かもしれない。一方 カンタスを使えば、東京発 20 日(火) 20:30 — シドニー発 21 日 9:30 — ポートモレスビー着 13:10。日食まで 2 日近くある。帰りはポートモレスビー発 25 日 15:15 — シドニーで 1 泊して 26 日 21:45 発 — 東京着 27 日(火) 6:05 という 8 日間の旅程となろう。(この場合も日食の午後にポートモレスビーを飛び立てば、シドニー着 20:30、1 時間 15 分後の 21:45 発のカンタス便に乗れば、東京着 24 日(土) 6:05 — なんと、5 日間、くわしくいうと 4 日 10 時間 / しかしこんなことは不可能に近い)。

上に述べたのは、最近の夏期のスケジュールだから、冬になると多少は変わるおそれあり、とくにホンコン・ポートモレスビー間は、今までの例からいっても、くるくる変更する可能性が強い。筆者が下見に行ったときと本番のときに、面食らうほどだったことを思い出す。

さて、ポートモレスビーに着いてからのことに移ろう。入国手続き・ホテル・町の様子・交通機関などについては、手前みそになるが、本誌 1983 年 6 月 1、「星の手帖」1983 年冬・春号などを参照してほしい。1983 年日食後の天文各誌も多いに参考になるはずである。ここでは、今回の皆既帯でもっとも中心線に近い陸地、つまりフッドポイントまでの詳しい地図を、転載しておくにとどめよう。ポートモレスビーから南東へ約 100 キロ近く、道は途中からデコボコに変るが、相応の注意をはらえば、決して危険というほどではない。しかし夜間の通行は避けた方がいい。山奥から観光客をネラう山賊が出没するのは、決して最近の流行ではない。観測地で夜を過ごす所は、民家かバスの中か、いずれにしても予めの計画、現地との連絡が、十分密接に行われていることが必要であろう。

パプアニューギニア政府の刊行物をひとつ紹介しておこう。在日パプアニューギニア大使館で入手可能であり、一般の観光案内とはひとあじ違った情報が得られよう。

“This is Papua New Guinea” published by the Government,
Office of Information, July 1980 (B5, 181 ページ ¥ 2,640.)

* 5 月 3 日付朝日新聞の家庭ページに、“主婦が見たニューギニア”というルポがある。皆既帯のすぐ北のワメナで触れた / 原始の生活、というタイトル。ま、一読しておこう。

2. ニュー・カレドニア

第 2 の観測候補地である、といっても、最初に述べたとおり、唯一の皆既帯が通る島サンディアイランドは、すでに消えた / 黒い太陽を観測するには、海上に出ねばならない。具体的に言えば、首都ヌメアからサンゴ海を南へ百数十キロ、乗り出す必要がある。小ぼけなボートのような船は論外であり、望遠鏡を据えられるような、また写真が写せるほど安定した船が保証されな

いとすれば、観測旅行計画として失格である。日食は二の次ぎで、新婚旅行が目的または新婚さんを眺めるのが目的、というツアーならば別である。

始めに引用したアメリカ海軍天文台のサーキュラーに、皆既帯の詳細図が何枚も載っているが、消えたサンディ島近辺以西までであり、その東にあるニューカレドニア本島もその南方海上の皆既帯も、全く載せてない。やはり海上観測の必要性を認めてないように思えるのだが……。

それはそれとして、首都ヌメアまでの足を記そう。東京から直行便はUTAフランス航空が週1便。東京発21日(水)21:30、ヌメア着22日7:50で日食の丸1日前。帰りは日食後4泊して27日23:59発、東京着は28日(水)6:30の8日間コースとなる。

もうひとつの方法はシドニーで乗り換えて、次のように計画できる。日本航空で19日(月)21:30に東京発、20日9:10シドニー発のUTA航空で12:50ヌメア着。日食まで2日半の準備期間あり。帰りはカンタス便で24日14:30発、シドニー発22:00、東京着は25日(日)6:15という7日間コースである。

バプアニューギニアの場合も同様であるが、航空運賃については、触れなかった。良心的なエイジェントに相談することを、おすすめしておく。いろいろな条件、たとえばA経路ならば1人でもいくら、B経路を使えば何人以上でこれこれ、という具合に相談のしてくれるはずで旅は添乗員がつけば安心であろうが、その世話料と安心料は相対の対価を必要とすることを、お忘れなく。観測(理論と実際)、旅行(経験と言葉)、それぞれ能力のある天文仲間の協力を求める方が得だ。

せっかく遠くまで行くからには、目的地の状況、観光したい場所などの予備知識を持つていた方がいい。この島にはキャプテン・クックが1774年に立寄っている。1853年からフランス領、面積1.9万km²、人口15万人、ヌメアに4万人が住む。鉱物資源が多い。

入国にはビザ不要(90日以内滞在のとき)、時刻は日本より2時間進んでいる。ヌメアの11月の平均気温23℃、雨量50ミリ、降雨日数6日、通貨はペシフィックフラン=3~4円、空港からヌメア市内まで53km、バス1時間半、電圧220V、50サイクル。

現地観光局のパンフで「観光」の項の最初を紹介しておこう。

“どこから始めたらいでしょうか。ニューカレドニアには1年かかっても見きれない程の景勝地や名所があります。まず世界第2の大きい環礁から始めましょう。グラスボトムボートで美しい海底と水中の植物の間をぬってカラフルな熱帯魚が群をなして泳ぐさまをごらんください。熱帯産の動物や鳥も珍しいものが見られます。カグーと呼ばれる独特の鳥をご存知ですか?……珍しい魚貝類のコレクションで世界的に知られたヌメア水族館の見学はぜひスケジュールに入れていただきたいもののひとつです……”

博物館(住民の住居・生活用具・武器)、水族館(生きた化石といわれるノーチラス)、森林公園(カグー)、アメデ燈台(ナポレオン3世の建設)、大平原地帯(6000種類の自然植物園)イル・デ・バン(95km離れた小豆島ぐらいの島、南洋杉と礫湖、双発機で30分、日帰り)

きる)、ウベア(森村桂「天国に1番近い島」の舞台、百数十キロ離れているが、45分で飛べる) などなど、時間と財布次第で、楽しみは多いようである。「ヌメアでのショッピングはパリーと同じです」、というようなガイドブックの誘いには乗らない方がケンメイと思うが――。

